

執行部より

This is KDA

第30回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会会頭 **栗原誠一**
(湘南皮膚科)

この元気さはどこから生まれてくるのだろうか。記録に残っている先輩たちの航跡をみると、神奈川県皮膚科医会（以下、神皮）のメンバーは発足当初から自由に縛られない雰囲気を持って、いつも医会活動を楽しんでこられたように見える。厳しく指導された訳でもないのに、われわれもいつの間にか神皮流に染められてしまっている。私が加わった頃の医会は、重鎮や幹部の後ろ姿を見て楽しみかたを汲み取ったものだが、その漠然とした医会の面白さを具体的な言葉で表して、大所帯が価値観を共有するための下地を作って下さったのは原紀道先生だと思う。曰く、自由な気風を満喫する、会員構成も会の運営も「ファジー」さが多様な考え方を生み出す、「感性の豊かさ」が診療や遊びの幅を広げる、「楽しむこと」が自分を活性化させる。このようなキャッチコピーを聞いただけで楽しい医会が見えてくるではないか。



前夜祭・サブゼロの手前。大栈橋のデッキにて

神皮の企画はいつも凄いと褒められるが、どこが凄いのだろう。一つにはいわゆる民度の高さが挙げられると思う。神皮の例会を順繰りに担当することで、自らの考えを具現化する方策を学び、「楽しみ、楽しんでもらう」経験を積んだ仲間が増えてくる。そんな若手がゴロゴロいる組織なのだから当然である。もう一つは実行する力だ。どんなアイデアでも企画倒れにならないよう、仲間が知恵を出し合って共に練ってくれるから安心していられる。価値観を共有している安心感と力強さを実感する。加えて、最も素晴らしいのは向上心ではなだろうか。神奈川でなければできないこと、神奈川だからこそできることをやろうという姿勢はKDAの誇りだと思う。

この第30回大会を振り返ると、様々な難題を乗り越えて参加者から高い評価を頂戴することができたのは、鎌田事務局長を始め班長・実行委員の底力が存分に発揮されたためだと思う。原先生～菅原先生の頃より現在まで、蓄積された神皮のパワーをどのような形で引き出すか、真剣に考え抜いた結果が報われたものと、これまた皆と一緒に大いに自負したい。

また、アドバイザーの諸先生にはこの場を借りて厚く御礼を申し上げる。会議では実のある的確なアドバイスをいただき、ある班は組み立てを変えたほどであった。お陰でさらに素晴らしい企画になり、参加者が溢れるほどの大好評のセッションになった。

最後に、折に触れて助けてくれ、参加して会を盛り立ててくれた神皮会員の皆様には心より感謝申し上げます。

今大会はホームページを計3回更新して、日臨皮会員の興味をそそり参加を促す情報を発信し続けた。以下に第2号平成25年秋号の文章を紹介する。

第30回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会 開催のご案内ならびに演題募集

ごあいさつ

第30回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会を平成26年4月26日（土）、27日（日）に開催いたします。横浜での開催は第3回（故中野政男会頭：昭62年5月）第11回（加藤安彦会頭：平成7年6月）について3回目となり、今回も神奈川県皮膚科医会の全面的なバックアップによる世代を超えた歓迎と心意気を楽しんでいただければと思います。会場となるパシフィコ横浜会議センターはお馴染みの感がありますが、大会期間中は様々な趣向を凝らす予定ですので、一味違った横浜をご期待ください。

また、昭和59年7月に発足し昭和60年5月に第1回大会を開催した日本臨床皮膚科医会が30周年を迎えます。本会に併行して創立30周年記念行事が執り行われますので奮ってご参加ください。

大会のメインテーマは第30回という節目にちなんで「日臨皮30年 皮膚科を楽しもう」としました。医療環境がどのように変容しても、われわれには“目”があり“技”があります。皮膚科医であることに自信と誇りを持って、皮膚科医生活を楽しもうじやありませんか。大会を組み立てるに当たり、各世代からのアイデアを活かすために副会頭2名を置き、実行委員は企画ごとの班分けをしてプログラム委員を兼ねることにしました。皮膚科医に欠かせない素養に磨きをかける「Sings & Symptoms」、生涯を通して皮膚を考える「Life of Skin」、学会に出て来られない女性医師や若手医師を対象とした企画、レセプトの模擬審査企画などを中心に、色々な切り口からプログラムを練っています。また、事前のアンケート調査や会場でのアナライザー使用といった、参加者と一緒に考えるセッションを準備しておりますので気楽にご参加ください。

また、初日土曜日の午前から、“見のがせない、聞くだけでも皮膚科医度のアがる講演”が組まれています。ぜひ前日の金曜から横浜にお出かけください。横浜フライデイトを有意義な時間にするお手伝いを考えています。詳細はホームページに掲載しますので、適時ご確認下さい。

本大会では、一般演題（ポスター発表）とMy favorite signの募集をいたします。一般演題は発表区分を若干みなおしてエントリーしやすくしました。“私のサイン”は会場で評価しあったものを雑誌・皮膚病診療の平成26年増刊号に掲載予定です。多数のご応募をお願いいたします。

以上、開催のご挨拶ならびに概要のご案内をさせていただきました。進行状況などはホームページで逐次お知らせしますのでご照覧いただければ幸いです。

来年4月に横浜でお会いすることを楽しみにしております。

平成25年 秋10月

会頭 栗原誠一

総括（総会顛末）

事務局長 **鎌田英明**
(JCHO 横浜中央病院)

第30回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会を栗原誠一会頭の下、成功裡に終わらせることができ、事務局長として心より安堵しています。

実は第30回総会を神奈川でやろうというご意向を、当時の神皮会長栗原会頭が、やはり当時幹事長だった私に話されたのは4年ほど前のことになります。当初、それだけでなく神皮をはじめとして仕事が一杯でこれ以上抱え込むのはというのが本音中の本音でした。

しかし、「マジですか〜？」などと今時の若者のように最初は生返事をしていたのですが、会頭の熱は冷め

ることなくむしろヒートアップしていきました。日臨皮の副会長でもある私が絡んでも良いのかとも考えましたが、若林正治会長、江藤隆史副会長とも相談し、併せて日臨皮30周年記念行事も本部役員として担当するという目で度々内諾が出ました。

開催するにはまず会場を押さえることが先決だと考えました。横浜で開くには規模的にパシフィコの会議場以外には思いあたらず、HPで確認したところ申し込みは2年前となっていました。しかし、なんとなく虫の知らせという不安を感じ、栗原会頭を無理に引っ張り出し、とりあえず話だけでも聞きに行くことにしました。すると、開催しようと思っていた4〜5月で空きがあるのは、ゴールデンウィークとその前の週だけという驚きの事実が判明しました。その場で迷わず、会期となった4月の26、27日を仮予約したことは言うまでもありません。「3年前のあの日がなければ総会は開けなかった」と、いまだに会頭との酒の席では思い出話になっています。

今だから言えますが、福岡での総会で正式決定される前にフライング気味ではありましたが会期と会場は決まっていたわけです。

その後、優秀な人材の宝庫である神皮会員に実行委員をお願いして栗原会頭が示されたテーマごとにグループ分けをし、夫々のグループ長を中心に度重なる話し合いが持たれ、中身が煮詰まっていきました。実行委員長をお願いした齊藤典充先生は、各テーマの話し合いの場にほとんど顔を出して状況を把握し、私や栗原会頭に進捗状況を報告してくれました。ご自分の仕事もありながらのことで、今考えても頭が下がります。

頭が下がると言えば、会頭が示された夫々のテーマは私から見ると結構実現するのが大変ではないかと思われる、いわば栗原イズムの集大成のようなコンセプトが満載の各テーマでしたが、どのような構成にしてどのように進めていくか、各班とも話し合いを進めるにつれて見事に形作られていった過程は圧巻でした。総会終了後暫くして山川有子先生が「メールが来なくなり寂しくなりました」と言うのを聞いて、本当にそうだと思います。最盛期には1日に50〜60通のメールが飛び交うのも当たり前だったのですから。それにしても、神皮会員の潜在能力の素晴らしさに今更ながら頭が下がる思いです。

さて、こうして皆が力を合わせて成功に向けて頑張っている姿を目の当たりにして、心置きなく仕事ができるように費用面も含めた環境作りをしていくのが私の大きな役目と、メディカル東友の折内さんを脅したりすかしたりしながら外堀を埋める作業を粛々と進めていきました。

しかし、この期に及んでも一度はバルーンを潰したはずのファンタスティックな栗原イズムが再度膨らんできて、「やっぱりダメか？」という会頭の嘆息を何度も聞くことになりました。でもそのうちに、可能な限り



やれることはやろうじゃないかという気持ちに私自身も変わっていきました。「やりましょう！」と言った時の会頭の笑顔は我々の原動力にもなり、会が終わってみれば、その栗原イズムが参加者の賞賛の的になったことに改めて馬鹿な事務局長を押し通さなくて良かったと思っただけです。

順風満帆に思えた総会への道でしたが、最後の詰め段階まで来て、まさかの「プログラム遅延事件」が勃発してしまいました。後で分析すれば要因は多々あるのですが、事務局長としてもっと早くから指導力を発揮すべきであったと深く反省しています。

しかし、怪我の功名というのが適切かどうかは分かりませんが、皆で力を合わせて一晩で校正を行うなど神皮の底力がここでも発揮され、直前で皆の気持ちが総会に向けて改めて一つになった瞬間でもありました。私自身は倒れそうでしたが……。

そんな総会もあっという間に終わってしまいましたが、閉会式で過去最高の参加人数だったとの情報に、苦勞が一度に吹っ飛んだ想いでした。でも、もう一回総会をやれと言われても、当分やる気にはなれないでしょうけれど。

「いるだけ」役もひと仕事

副会頭 増田智栄子
(いずみ野皮ふ科)

楽しかった第30回日臨皮総会・臨床学術大会から早4ヶ月が過ぎた。私の机は2014年4月27日終了時のまま全てを放り出して時間がとまっている。記録集作成を機会に、書類を片付けながら、行き交ったメールをあげ、記憶をたどってみた。そして、私はいつどうして副会頭に収まることになったのか思い返してみた。

会頭とは国保の審査のときに、会の構想を夢のように語り合うことが多く、そのときに出た話だったと思う。2012年の年末頃、会のアウトラインができあがり、実働する人を決めようという時であった。「この学会は女医と若手にきてもらいたいと思っている。初めての試みだが、女性の副会頭をおきたい。それで先生になっ

てもらいたいと思う」という話であった。今振り返ると、女性登用を謳っている安倍首相よりも先見の明がありその発想は素晴らしいと思われるが、「エっ、副会頭って何をすればいいの」と聞くと「客寄せパンダだから『いるだけ』でいい」との返事だった。

私は客寄せパンダのような有名人でもないし、そのような得体のしれない大役が出来るのか不安であったが、子育て終了、義母も元気で自分を阻むものが現在なく、自分を試す人生最後のチャンスと思い引き受けることにした。急に賢くなることはできないので、背伸びをしない範囲で、女性医師班企画が上手くいくようフォローし、少なくともいつ誰に聞かれてもいいように進捗状況を把握して、広報役に徹しようと腹を決めた。

女性医師班企画も会頭に相談すると、「常勤を辞める女医が後を絶たないのだから女性医師問題はまだまだ掘り下げることがあるのでは」ということで、日皮とは異なる視点で女性医師問題を取り上げることにした。これを具体化していくのは大変な作業で、山川先生が、女性医師班代表として粉骨砕身で頑張って下さり、



4月25日会頭招宴会受付



2013年11月2日、増田自宅で行った女性医師班会議。アンケート解析初会合

joy derma clubのメンバーで何度も会議を重ねて立案、分担して行って、「女性医師本音討論会」へと発展した。

山川先生に「先生がいてくれると安心」と言っていたが、「いるだけ役」も捨てたものではないなとうれしく思った。

また、進捗状況把握のため、毎日メールにかじりついていて、その間、みんながひとつになっていると感じたことが2つあった。ひとつは4月3日のプログラム抄録集の校正で、メールが夜中まで行き交い一夜にして校正が完成したとき。もうひとつは、女性医師班の4月10日の通しの予演の前日で、ケースレポート

やアンケートの解析グラフが飛び交って、携帯をかけながらPC画面をみて、みんな話が通じることに感激した。出身大学・所属医局を越えて、神皮としてひとつになっていることに喜びを感じた。

他には愚痴の聞き役と雑務係をしたかな。

折角、抄録集の校正が素早くできたのに、その後の印刷がもたついて、事務局長の血相が変わっていた4月中旬、私は公開講座の事前準備で学会屋さんの動きの遅さに憤然としていたころ、事務局長と前夜祭の打ち合わせに行った。二人で愚痴大会をしているうちに、自分たちでやるしかないとの結論に達し、事務局長に「事情を分かってくれるので気持ちが楽になった」とおっしゃっていただき、副会頭としての役目ができたかなと思った。

学会1週間前になると、懇親会のファンファーレを何秒間にするか、合唱曲は何にするか、楽譜はあるか、歌詞はあるかと矢継ぎ早に問い合わせがあった時もすぐに「ハイ、これ」と送信することができた。前夜祭も直前に仕切り役を命じられて内心困ったが、みんな血眼になっている状態だったので、引き受けざるを得なかった。とにかく協力出来ることは夢中でやった。

学会前日は、前夜祭挨拶、女性医師本音討論会の総司会、公開講座の司会の原稿を書いて頭に入れて、一日一日終わっては裏返し、さながら卒試の科目をこなしていくような感じであった。

チームの力は「旗振り役」、「牽引役」、「実行役」とみんなが分担協力して成し得るもので、船頭ばかり多くても山に上るし、この点、神奈川のメンバーは謙虚な方の集団でほんとに気持ち良く結集できたと思う。そして、「いるだけ役」も、物事がスムーズに行くための、潤滑油のような且つ後押し役のような仕事で、組織としては必要な仕事であったと思っている。それを命じた会頭は全てお見通しであったのか、それとも相手を追いつまないとはいえない思いやりだったのか、今も分からないが、思いっきり手作りで、神皮会員が一致団結して取り組めた一大イベントの一員になれた幸せに今浸っている。

所感～4月3日夜のこと

副会頭 浅井俊弥
(浅井皮膚科クリニック)

日臨皮の本部に加わって6年になる。手前味噌だが、ここ数年、日臨皮の総会・学会大会がおもしろい。我ら栗原誠一会頭が、まさにそうであったように、皮膚科医の多くを占める開業医の目線で、臨床に即した疑問の解決や必要な鍛錬の場を与えてくれているからだと思う。日臨皮創立30周年の会を神奈川で迎え、無事に

終了することができた。神奈川県皮膚科医会がこれまで培ってきた、「皮膚科を楽しむ」というコンセプトを日臨皮の全会員に伝えることが叶ったのではないかと思う。

さて、会の開催とその準備の中で、最も印象に残っているのは、4月3日夜のことである。メ切のある仕事に携わっていると、本当のメ切がいつになるのか、おおよその予想がつくので、いつ気合いを入れて仕事をするかは逆算して決めている。月初めはレセプト点検と皮膚病診療のコラムで、診療後の時間を費やすことになるのだが、その日の夜は特別だった。総会プログラムの作成が遅くなっていることは気になっていた。企画には自信があったし、プログラムを見て、「面白そうだ、行ってみよう」という会員がたくさんいるはずだと思っていた。しかし、プログラムの校正がまわってきたのは4月3日の夜だった。気合いスイッチがONになる。皮膚病診療で培ってきた経験を駆使しよう。実行委員のみんなが、今、まさに同じ時間に、同じ校正に取り組んでいる。メールを通して、向こうの作業の様子が伝わってくる。その夜は、そういった一体感があった。なんとか、夜中までにはある程度の校正が終わった。総会1週間前に、プログラムが届いた。焦りもあったようで、できあがったものは決して完璧ではなかったが、4月3日の夜の苦労が、報われた瞬間だった。

栗原会頭から、副会頭の命を受け、特にSigns & Symptomsを仕切るということで、高須博班長をサポートすることになった。高須先生の企画は的確だった。西山茂夫先生、衛藤光先生、石川治先生の臨床のサインについて、古賀弘志先生、田中勝先生、土田哲也先生によるダーモスコピーのサインについてはいずれも日常診療の役に立つ素晴らしい講演で、今も印象に強く残っている。私自身は、栗原会頭が一番やりたかったという、My favorite signsのセッションの座長を三橋善比古先生と一緒に務めた。12の演題が集まったが、2時間をどう使うかは直前まで決まっていなかった。短くなった時の対応を考えていた。三橋先生とは、座長ふたりで12演題の前後に講演をはさむことに決め用意をした。しかし始まってみれば、会長講演の直前ギリギリまでかかってしまい、残念ながら私の講演はまぼろしとなったのである。

公開講座が満杯になったこと、参加者が過去最高になったことを閉会前に聞いた時は、うれしかった。やり遂げた充実感もさることながら、その後学会で出会った色々な先生方から、「いい会だった」と賞賛の声をもらったことは、何にも代え難い、元気のもとになった。皆さん、お疲れさまでした。



2日目午前、My favorite signsで座長をつとめた三橋善比古先生と小生。三橋先生は平成26年10月18日、63歳で永眠されました。ご冥福をお祈りいたします。